

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 12 日現在

機関番号：33906

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24531221

研究課題名(和文)ESDを基盤とした子どもたちの大陸間交流活動とカリキュラム開発に関する研究

研究課題名(英文)Children's intercontinental exchange activity based on ESD and study about curriculum development

研究代表者

宇土 泰寛 (UTO, Yasuhiro)

椋山女学園大学・教育学部・教授

研究者番号：70465508

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：地球社会の持続可能な未来を求めて実施されているESD(持続可能な開発のための教育)の実践モデルの創出を図った研究である。そのトピックは、人間やすべての動植物にとって絶対に必要な「水」である。このグローバルイシューの水問題に対して、ブルキナファソ、フランス、日本、そして、オーストラリアの国々の子どもが、自らの地域を調べ、大陸を越えて学び合い、メッセージを歌詞にして、国境を越える表現力を持つ合唱やミュージカル活動を通して世界に訴えた。

この「大陸間ミュージカル広場」の活動は、子どもたちのローカルとグローバルな視点を持った資質形成と大陸を越えて協力し合い、問題解決を図るアクティブな市民性を形成した。

研究成果の概要(英文)：This study is a research of creation for the practical model of ESD, which is education for sustainable development of global society. The topic is "water", which is absolutely necessary for all humans, plants and animals to live on the earth. This water problem is a global problem as well as a local problem. Children in Burkina Faso, France, Japan and Australia studied about the water issue in their own local areas, and learned together between continents, composed the lyrics from children's messages in each countries and sang the chorus named "I LOVE WATER". Through these activities, children from four different continents, such as Africa, Europe, Asia and Oceania, did the musical together and appealed to the world how big this water problem was.

In "Intercontinental Musical Square", children cooperated each other between four continents, and got both local viewpoint and global viewpoint and acquired the active citizenship through the problem solving.

研究分野：国際教育

キーワード：国際教育 大陸間教育 水の学習 問題解決学習 フランス ブルキナファソ 合唱 ミュージカル

## 1. 研究開始当初の背景

(1) ESD (持続可能な開発のための教育・Education for Sustainable Development) の必要性和教育改革

2002年のヨハネスブルク・サミットにおいて、地球社会の未来を見据えて、ESDが提示され、国連を中心に2005年から10年間にわたって世界中で実施されることになった。しかし、日本国内の学校において、まだ研究と実践が十分には行われていない。このESDにおいては、開発と環境のつながり、世代間のつながり、先進国と開発途上国のつながりなどがキーワードになる。このつながりを生み出すには、「教育のパラダイム転換」、つまり「伝達志向型(transmissive)」から「変容志向型(transformative)」へという「教育の文化変容」が必要である。しかし、日本の学校教育の現状では、教員の意識改革や学校組織運営の改革、カリキュラムや教育方法の変革も必要であり、ホールスクールアプローチとしての教育実践が必要とも言えた。

(2) 宇宙船地球号プログラムの創出から生まれたカリキュラム開発と資質形成の研究

本研究の発想は、1990年に国際化に直面した学校で、教室の国際化を目指して「宇宙船地球号プログラム」を開発し、その授業での子どもたちの自己概念の変化をTST [Twenty Statements Test of Self-Attitudes]で調査し、知識の習得から態度形成への転換点をなす要因を見出し、国際理解教育研究所主催 第18回国際理解教育奨励賞論文募集で「優秀賞」を受賞した研究からである。また、文部省(1996)の道徳教育推進指導資料(指導の手引6)「地球を救おう子ども会議」(全国の小学校に配布)は、ここでの内容を最初に子どものための物語として提示したものであり、その後、地球的視点と資質形成の研究を基盤に、「地球子ども教室」、「地球子ども博物館づくり」などの実践を創り出したり、市民性教育の理論研究に関わったりした中で、今回の実践的な研究構想が生まれた。そして、2007年、東京都港区での世界銀行とJICAの協力による日本とブルキナファソの子どもたちのテレビ会議の実現へとつながり、さらに、今回の愛知県の小学校での実践研究へと発展したのである。

(3) ブルキナファソの学校への机と椅子の寄贈と交流から始まった実践と学校改革

本研究の拠点となった名古屋市の椋山女学園大学附属小学校は、「人間になろう」の理念を掲げ、110年の伝統を誇る椋山女学園の初等教育を担い、60年の歴史を刻んできた。そして、新たな時代を見据え、「椋小ルネサンス」として、保護者や地域の人々と共に、学校改革を進めてきた。

国際的なつながりの契機は、2010年6月のディズニー映画監督の来校と1年間かかったブルキナファソ国への机と椅子の支援交

流プロジェクトであった。この具体的な国際教育交流の展開をもとに、学校の国際化が推進された。同時に、学校にあるピオトープを生かして、環境教育でのプロジェクトが立ち上がり、地域の歴史や自然、そして地域の人々との活動へと広がってきた。これらの活動を全校児童の主体的な意識形成や参加を促すために、学級社会自体の学びのコミュニティへの変革、協同的な学び合いによる学びの深まり、そして、共生意識と態度形成を目指して、「宇宙船地球号カリキュラム」をつくり、学年の壁を越えたホールスクールアプローチの実践を行ってきた。そして、「宇宙船地球号」をメインイメージに、「水と生活」をテーマに、大陸間をつなぐ子どもたちの活動へとつなげていったのである。

(4) 学校と地域社会のネットワーク

本研究の計画を実行するには、日本国内のネットワークとブルキナファソやオーストラリア等とのネットワークの複合的な活動が前提となった。まず国内の基盤は、椋山女学園大学附属小学校及び椋山女学園大学である。国際ネットワークのブルキナファソは、机と椅子の支援を中心に、今まで協力して活動してきた駐ブルキナファソ日本大使館と杉浦日本大使自ら机と椅子の贈呈に関わり紹介して下さったブルキナファソ政府及び現地の市役所が基盤となった。そして、机と椅子の運送で、社会的貢献活動としてかかわっている商船三井等の民間会社も協力者として、大きな力となったのである。

オーストラリアは、椋山女学園がシドニーやパースでの研修で築いてきたネットワークを中心に現地の学校や地域の人々との協働的な活動を通して行った。特に、国際理解のテキスト「オーストラリアBOX & STUDY」の共著者であるAnne Zahalka氏とは、日常的に連絡を取り合ってきた。さらに、水の問題調査や絵画交流は、本大学教育学部の協力と附属小学校の専科教諭の協力を得ることができた。

## 2. 研究の目的

本研究は、地球社会の持続可能な未来を求めて国連を中心に実施されているESD(持続可能な開発のための教育)を日本と世界の子どもたちが共に、共通の地球的課題を学び合ったり、地域活動をしたりすることを通して具現化し、地球社会の持続的発展と地域の日常活動を担う複眼的な視点をもった子どもたちの育成と教育開発の基礎的研究を行うことを目的とした。

そこで、愛知県名古屋市にある椋山女学園大学附属小学校と西アフリカ・ブルキナファソ国との国際交流・支援活動を基盤としながら、すでに交流実績のあるフランスやオーストラリアなどの国の子どもたちと共に、ブルキナファソ国の小学校や地域の人々への支援や交流を行い、2014年の国連ESD世界

大会（愛知開催）で提示できるE S D活動モデルを創出することを目的とした。

このような持続可能な開発を目指した活動では、A C C U（Asia/Pacific Cultural Centre for UNESCO）が“Tales of Hope”で述べているように、「自然環境と人間活動の調和だけではなく、人々が互いを尊重し、寛大で暴力のない平和な社会に向けた取り組み」であり、人々のつながりが世代間を越えて地域の中で、そして、国を越えてつながり合っていくことが重要である。

そこで、小学生だけではなく、大学生や大人も取り込み、子ども・学生・大人の多彩な世代間のつながりを実現した活動を創出する。さらに、東海地方は、外国人児童も多く国際化の進展している地域であるので、多文化共生の関係づくりも展開する。そのために、活動に取り組む子どもの価値観や態度形成、生活様式、大人世代とのつながり感、異文化への態度など、公共性や市民性も踏まえて、E S Dを通じた心理的变化や資質形成の基礎研究と資質形成のカリキュラム開発を目指したのである。

### 3. 研究の方法

本研究は、子どもたちや学校や地域や世界の国の人々と協働し、実践を創り出しながら、その活動主体の資質形成とカリキュラム開発やプロジェクト創出を研究するものであるので、研究方法としてアクションリサーチに依拠することにした。

それ故に以下の項目が研究の柱となったのである。

地域や学校の中に持続可能性を求めるプロジェクト活動を創り出し、継続するという実践創出型の研究である。

地球的課題としての「水問題」の理解、日本も含めた各々の現地の実態を調べ、把握することが必要であり、フィールドワークの調査も実施する。

「水と生活」をテーマにしたE S Dのカリキュラムや児童用テキストづくりなどを行う教育開発の研究である。

交流相手国における活動を現地の協力者と協働的に進める国際的な協同研究である。

大陸間をつなぐICT技術を子どもたちの活動に生かし、テレビやスカイプ交流などICTの情報教育研究でもある。

「水と生活」をテーマにした子どもたちの現地レポートの発表や絵画・写真の交流を行う。また、大使館やJICAなどの協力を得て、大陸間の子どもたちをつないだ地球授業や合唱劇、ミュージカルなど、アートや音楽などと融合した研究実践である。

活動に参加している子どもたちの態度や資質形成の研究を行い、子どもたちの意識変容や学び合いの構造などを探る研究である。

学校改革と学び合いの学級づくりなど、E S Dを基盤としたホールスクールアプローチによる研究実践である。

### 4. 研究成果

#### （1）各大陸の水問題調査と各学校とのつながりと水の学習の相互理解

本研究は、E S Dを基盤とした子どもたちの大陸間教育交流活動とカリキュラム開発に関する研究である。そのために、日本国内から各大陸の水問題の調査研究と子どもたちの学びへの妥当性の検討、E S Dや協同的な学び、教育学上の理論的動向、子どもたちの態度形成の調査研究、学校改革の動向など、多様な側面の研究が関わることになった。

まず、日本側の研究実践の拠点になる椋山女学園大学附属小学校での国際交流活動とカリキュラム開発、教師の意識改革や授業形態など、学校文化からの変革を今回のプロジェクトでなすことができた。

日々の教育活動では、従来の知識伝達型の授業から、「協同の学び合い」を核に、研究を推し進め、全ての教育課程と学習環境や教員研修体制なども含めたホールスクールアプローチとして実践研究を図り、共通テーマとして、「水と生活」を明確に掲げ、全教員が、社会や理科だけではなく、国語、算数、音楽、体育、総合、英語など多様な教科や領域から、水に焦点を当てて、カリキュラムを作り、教材を開発し、詳細な指導案を作成し、2学期に授業公開を行ったのである。そこには、日本のE S D研究、国際理解教育研究のトップクラスの研究者が多数全国から集まり、実践研究についての助言や励ましをいただくことができた。この公開研究会を土台に、校内の研究会で、一つ一つの実践を検討し合い、全体の実践的カリキュラムの全体構造図を作成することができた。そして、新校舎の吹き抜けの空間を使って全校合唱を行い、参観者に感動を与えた。まさに協同的な学び合いから始まった本校の研究実践は、「地球的な課題（グローバルイシュー）を基盤としたユネスコスクールとしての取り組み」として本格的な展開が試みられたのである。

地球の持続可能な開発をめざす分野でも、大きな前進を図ることができた。

まず、オーストラリアのパースにあるグーレラル小学校とは、パース訪問による校長同士の話し合いとオーストラリアの抱える水問題調査を契機に、日本とオーストラリアの両小学校の合同のエクスカージョンが実現したのである。一緒のバスに乗り、パースの水の供給源であるマンダリンダムに行き、水問題についての体験的な環境教育と水に関する悲劇的な歴史も学ぶことができた。これは、日本の東海地方の木曾三川の輪中や干ばつに苦しんだ三河地方の明治用水、愛知用水を学ぶ椋山小学校の子どもたちの学習にも大いに刺激を与え、まさにオーストラリアの学校との合同エクスカージョンによる学び合いは、大陸を越えた学び合いとなったのである。

また、オーストラリアの水問題を把握し、教材開発のために、西オーストラリアの実態

調査に続き、オーストラリア最大の課題と言われるマレー川流域を 1000km にわたって踏査し、その実態を把握したり、川の都と言われるプリズペーンを訪問し、その実態を把握したり、より広くオーストラリアの水問題を把握し、教材開発に役立てることができた。

次に、ブルキナファソのル・クルーゼ学園小学校については、ル・クルーゼ学園理事長や大使館関係者の招待によるパネルディスカッションを契機に、ル・クルーゼ学園小学校の子どもたちの取り組みがより明らかになった。そこでは、プロジェクト学習で自らの国の水問題を丁寧に調べ、水の実態を明らかにし、衛生的な水を飲めない地域や人びとにはどのような病気が引き起こされるのか、その問題を解決するためにはどうしたらよいかと具体的に調べ、問題解決の方法を考え、フランスの学校にもプレゼンテーションをして、協力を呼び掛け、いろいろな取り組みを行い、募金を集め、衛生的な水が確保できる深井戸を実際に掘っているのである。そして、椋山小学校の教職員や子どもたちに、その取り組みを示すことができた。

## (2) ESDユネスコ世界会議と大陸内のリージョナルなつながりをめざした取り組み

本研究は、ESDに関する研究であり、2014年11月10日～12日に愛知県、名古屋市で開催されたESDユネスコ世界会議とも関わるものであった。特に、小学生・中学生の「ESDあいち・なごや子ども会議」は、全体会議の閉会行事で子ども会議の主張を全世界に訴え、その発表者に椋山小学校の児童が選ばれ、堂々と発表できた。そして、11月14日に、椋山女学園大学附属小学校で、ホールスクールアプローチとしてずっと継続してきた実践研究テーマ「水と生活」についての「ESD公開授業研究会」を開催することができた。

しかし、公開授業と同時に、大陸間交流活動として協働していたブルキナファソ、フランス、オーストラリアとの国際シンポジウムを予定していたが、エボラ出血熱の流行で、打ち合わせや相互訪問等ができず、開催予定を1年延期せざるを得なくなったのがたいへん残念であった。

そこで、昨年度のパースやマレー川流域のオーストラリアの水問題調査に引き続き、椋山女学園大学附属小学校が交流しているアフリカのもう一つの国、タンザニアの水問題調査を行った。

これは、一つの大陸内でも多様であり、一国だけではなく、大陸内においても、国境を越えて、リージョナルな活動とつながりを探るなど基盤研究を広めることができた。ここでは、西アフリカのブルキナファソと異なる東アフリカのタンザニアの様子を、首都ダルエスサラームの町や教育、水問題、ザンジバル島の水問題、日本の小学校の課題図書『ただいまマラング村』の舞台となったキリマンジャ

口周辺の町や村、ティンガティンガアートの中心ティンガティンガ村の訪問と来日し椋小を訪問された絵師との再会、現地の公立小中学校の訪問とそこでの全児童のパソコンでの授業、日本人学校からのアプローチの可能性など、多くの新たなつながりや可能性を見出すことができた。中でも、タンザニアの街の中で売られている水が、郊外の川の水を汲んだだけで、ろ過もされていないという現場を探り当てることができた。

## (3) 国際理解教育研究大会での「大陸間ミュージカル広場」の活動モデルの提示

ESDを基盤とした子どもたちの大陸間交流活動として、地球的な課題であり、地域の課題でもある水問題を日本、ブルキナファソ、フランスの子どもたちが各々探究し、水問題解決のためのプロジェクト活動を実施してきた。そして、ESDのカリキュラム開発として、水の学習で学んだことを表現し合う試みをめざしてきた。2015年11月に開催された東海ブロック国際理解教育研究大会で、どのように発表するかを検討し合う中で、「大陸間ミュージカル広場 (Intercontinental Musical Squair)」活動を実施することにした。

この活動は、子どもたちは、水についてのイメージ、水に関する地域での問題を調査し、地球規模での水問題を探究し、自ら訴えたいキーワードを選び、歌詞を作る。そして、歌詞に専門家が作曲したのである。題名は「I love water」とし、曲の最後の歌詞はどの国も「I love water」を入れることにした。3カ国の子どもたちの歌は、国際理解教育研究大会のオープニングで、大勢の参加者の前で発表され、大きな反響を呼んだ。それは、同じメロディーの曲であるが、歌詞のメッセージは、3カ国それぞれの国の水の実態を反映しており、まさに、大陸を越えた学び合いが現れていたのである。

それは、日本の子どもたちの水に対する情緒的で美しい歌詞に対して、フランスの子どもたちは胎内から宇宙まで、過去から未来までの幅広い知的教養と感覚で訴え、そして、ブルキナファソの子どもたちは、水の汚染など水に対する危機意識をダンスと共に強く訴えたのである。

その後のシンポジウムでは、各国の水の実態、水の学習とカリキュラム、指導方法など幅広い視点で、3カ国の報告がなされ、それを元に、協議を行った。

この水の学びを音楽につなげる活動は、参加者の先生方にも非常に共感され、他の大陸の子どもたちはどうなるのだろうと関心を持たれた。さらに名古屋市の行政からも、注目され、音楽あふれるまちづくり事業として、2016年3月21日に、名古屋港水族館の大ホールでの発表会の実施までになった。9月には、ブルキナファソの子どもたちも招待し、合同でミュージカル公演を行う事になった。

### 3カ国の「I LOVE WATER」の歌詞

【日本】 名古屋市立蓬来小学校

水はいのち 世界をめぐる  
水はいのち 世界をつなぐ  
水はいのち 地球のたからもの  
水はいのち 水となかよし

水はどこからくるのだろう  
川と海をつなぐ いのちの水  
きらきら輝く水 きらきらはじける水  
ひとつぶの水が 川と川をつなぎ  
海と海をめくり 地球をみたく

水はいのち 世界をめぐる  
水はいのち 世界をつなぐ  
水はいのち 地球のたからもの  
水はいのち  
I Love Water I Love Water

【フランス】 Ecole de la VALEE

宇宙の中の青い地球  
大きな河 小さな川  
大きな海 小さな海  
すべての命の母 みんなあなたが必要  
東京でもパリでも みんなあなたが必要  
水は過去へ私たちを誘う  
恐竜たちは滝の下で鳴き声をあげていた  
今、水は私たちを潤わせきれいにしてくれる  
人魚や踊るクジラのように  
水は幸せをくれる  
枝を育て、花を咲かせ  
子どもたちの未来を守る  
生まれてくる子どもたちの微笑みも守る  
地球のすべて青い海  
貴重な真珠飲める水  
私は何ができるだろう  
この宝物を守るために  
すべての想いを込めて  
I Love Water I Love Water

【ブルキナファソ】 Le CREUSET Plus

ダイヤモンドや金よりも貴重で  
計り知れないほどの価値のあるもの  
分かち合おう きれいに保とう  
大切に気づこう  
水は生命だということを忘れないように  
水は命 命の源  
私は水が好き 私の愛する命だから  
水を守ろう 私の愛する命を  
この水はやさしい  
奇蹟で神秘的なもの  
この雨 命の水  
この嵐 この自然で命ある水  
水に問題が起こって 井戸がかれたり  
水源が汚染されたりすると  
生きてゆけない  
水を保護すること  
水をきれいに保つことを学ぼう  
水は命  
I Love Water I Love Water

### (4)水の学習と音楽を融合した大陸間教育活動モデルの創出

人間、そして、地球上のすべての動植物が生きていく上で絶対に必要な水、しかし、地球上のあらゆる人にとって、平等ではなく、地域によって様々な課題を抱えている。水問題は、地球的課題でもあり、地域の課題でもある。まさに、グローバルイシューと言える。この課題に対して、世界の子どもたちが、大陸を越えて学び合い、問題解決に向けての具体的な活動を行うことはこれからの持続可能な地球社会を創っていくためには、たいへん重要なことである。今回の研究を通して、日本、フランス、ブルキナファソの子どもたちが、大陸を越えて学び合い、表現、具体的行動を引き起こしたのである。その表現手段として、言葉は国や文化によって異なるが、身体表現と音楽(リズム)は国境を越える力を持っていることに着目し、音楽(合唱・ミュージカル)を通して大陸を越えたプロジェクトを実施したのである。

そして、異なる国の子どもたちの学びやメッセージ、そして、歌とダンスを見た子どもたちは大きな影響を受けた。ある子どもは、「I LOVE WATER を通じて、国境を越えて世界の人とつながることができて、とても楽しかったし、嬉しかった。それぞれの国の歌詞の内容は違ったけれど、伝えたい思いは、水は大切、川や海で世界はつながっている。この思いをみんなで共有できたことがとても嬉しかった。今後も、この気持ちを忘れずに頑張っていきたい。」と述べている。

また、この大陸を越えた子どもたちの活動は、名古屋市や「自然の叡智」「地球大交流」を掲げた愛・地球博継承事業からも着目され、地域の活動へと広がっていったのである。

今回は、名古屋市の私立の特定の小学校ではなく、一般的な公立小学校である名古屋市名東区の蓬来小学校で、実践できたのも一つの成果と言える。

### まとめ

これまでの研究と実践には、様々な側面と成果が生まれてきていたが、改めて、教育的な課題から見ると、次のような成果も生まれたと言える。

ESDからSDGsなど、国連も取り組む地球的課題をテーマに、大陸間をつないで、未来の地球社会を担う子どもたちが協同し、共通テーマに取り組み、地域の中で活動するという地球時代の教育の在り方を探究し、実践モデルを提示することができた。そして、学びの内容の変革、学びの方法の変革と1980年代から続いてきた教育変革を学びの場自身の拡張としての「学びのステージの変革」を提示することができた。

そこでは、従来のグローバル教育や国際理解教育が陥っていた匿名性の世界の知識を学習することから具体的な実名性の学び合いへと変革されているのである。

もう一つは、学級社会自体を「ひらき - つなぎ - つむぐ」という実践的戦略の基に、学び合いのコミュニティへと変革し、テーマの追究と同時に、学級社会自体の持続可能性を追求する実践研究を実施した。そして、学級、学年から学学校全体のつながりへ、さらに、学校のまわりの環境や教師の協働的研修、保護者との協力体制、地域との連携、世界の学校とのつながり合い、専門機関との連携など、学校システムの改革も含めた学校運営全体において取り組む教育研究活動であり、ホールスクールアプローチでの有効性を示した。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

宇土泰寛、林敏博「地域の水の学習から大陸を越えた水の全校合唱へ～ブルキナファソとフランスとの大陸間教育交流の一環として」、『教育学部紀要』第9号、椋山女学園大学教育学部、p.99～p.108、査読無、2016年

宇土泰寛「匿名性による学びを越える新たな学びのステージとしての大陸間教育へ向けて～グローバルイシューの問題解決の学習を通して～」、『教育学部紀要』第8号、椋山女学園大学教育学部、p.131～p.139、査読無、2015年

宇土泰寛「水問題の解決に向けた大陸間の教育活動～日本・オーストラリア・ブルキナファソの交流プロジェクトをめざして」、『教育学部紀要』第7号、椋山女学園大学教育学部、p.91～p.102、査読無、2014年

宇土泰寛「地球的課題を基盤としたESD(持続可能な開発のための教育)研究～ユネスコスクールとしてのホールスクールアプローチから～」(巻頭言)、『椋山女学園大学附属小学校研究紀要 2012～2013』p.1～p.4、査読無、2014年

宇土泰寛「水と生活についてのESDプロジェクト活動と地域調査～日本・オーストラリア・ブルキナファソの交流プロジェクトをめざして～」、『教育学部紀要』第6号、椋山女学園大学教育学部、p.115～p.128、査読無、2013年

〔学会発表〕(計8件)

宇土泰寛「世界の子どもたちが大陸を越えて学び合う“水と生活”～大陸間ミュージカル広場の活動を通して～」、『異文化間教育学会第37回大会、2016年6月5日、桜美林大学(東京都・町田市)

宇土泰寛、林敏博「地域の水の学習から大陸を越えた水の全校合唱」、『日本国際理解教育学会第26回研究大会、2016年6月18日、上越教育大学(新潟県・上越市)

宇土泰寛「世界の日本人学校をつなぐグローバルプロジェクトに向けて～グローバルイシューの問題解決学習を通して～」、『異文化間教育学会第36回大会、2015年6月7日、千葉大学教育学部(千葉県・千葉市)

宇土泰寛「グローバルな視点から生まれる大陸間教育活動のための現地調査～タンザニアの事例を中心に～」、『日本国際理解教育学会第25回研究大会、2015年6月14日、中央大学(東京都・八王子市)

宇土泰寛「地球的課題に取り組む大陸間教育活動～日本・オーストラリア・ブルキナファソ・フランス交流プロジェクトに向けて」、『異文化間教育学会第35回大会、2014年6月8日、同志社女子大学今出川キャンパス(京都府・京都市)

宇土泰寛「西アフリカ・ブルキナファソ国における水問題と大陸間教育活動～ワガドゥグエ市のル・クルーゼ学園小学校の取り組みを中心に」、『日本国際理解教育学会第24回研究大会、2014年6月14日、奈良教育大学(奈良県・奈良市)

宇土泰寛、ラウンドテーブル「Dialogic Teaching in Classrooms～対話にもとづく知的学習」発表テーマ「大陸を越えた学び合いと対話」、『日本協同教育学会第11回大会、2014年10月25日、創価大学(東京都・八王子市)

宇土泰寛「大陸を越えた水と生活についてのESDプロジェクト～日本・オーストラリア・ブルキナファソ・フランスの越境的学び合いをめざして～」、『日本国際理解教育学会第23回研究大会、2013年7月6日、広島経済大学(広島県・広島市)

〔図書〕(計6件)

宇土泰寛 他、明石書店 『異文化間教育学大系第2巻『文化接触におけるダイナミズム』第2章「小学校と文化接触～文化接触の場としての教室の変革」』2016 183(32-49)

宇土泰寛 他、明石書店 『国際理解教育ハンドブック』日本国際理解教育学会編著、「国際理解教育の実践 1 実践の展望 学校経営に生きる国際理解教育」, 2015 260(130-135)

宇土泰寛 他、明石書店 『現代国際理解教育事典』「地球時代の教室づくり」「国際理解教育と学校改革」, 2012 330(59、61、200、209)

宇土泰寛 他、三恵社 『協同の学びをつくる 幼児教育から大学まで』「小学校教育の実践：協同の学びから地球時代の学校文化づくりへ」, 2012 151(29-42)

宇土泰寛、中部日本教育文化会 『宇宙船地球号 水と生活の旅 ユネスコスクールにおけるESD「宇宙船地球号スクールプロジェクト」研究』, 2013 64

宇土泰寛、Anne Zahaika、中部日本文化会、『オーストラリアBOX & STUDY』, 2009、2013 32

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

宇土 泰寛 (UTO Yasuhiro)

椋山女学園大学・教育学部・教授

研究者番号：70465508